

新テストと授業改善 基本的な視点の整理

上智大学非常勤講師
新井 明

経済教育ネットワークでの取り組み・前史

- ・ ネットワーク当初から大学入試問題と現場の授業の問題が提起されていた（2008年の東京部会などでの議論）
- ・ **入試問題プロジェクト**（2010～11年）
主に私立大学入試を検討
入試問題と教科書、授業のトリレンマを解消することによる授業改善をねらう
- ・ **シンポジウム開催**（2010年3月）…杉田、金子先生出席
- ・ その後も断続的に課題としてきた（2012年の夏の教室など）

ネットワーク最近の取組み

- ・ 2016年年次大会…高校入試と授業を取り上げる
- ・ 2017年札幌冬の経済教室…入試問題をエコノミストが分析
- ・ **2017年、2018年夏の経済教室**…佐藤、鍋島先生による「大学入試問題から授業改善を考える」
- ・ **2019年札幌冬の経済教室**…鍋島先生による講演
- ・ **2019年夏の経済教室**…佐藤、鍋島先生による新テスト試行問題の分析と授業改善の提案
- ・ そして今回のシンポジウム

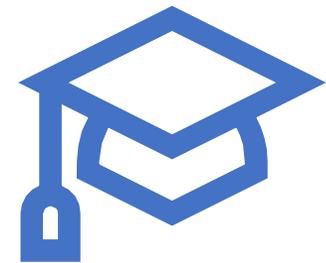
本日の問題意識

1 入試が変わることで授業が変わる

大学入試問題を巡るトリレンマの一角が破れつつある*

2 大学入試だけでなく、高校入試も変わっている

3 入試に関係ない学校の授業も変わらなければならない



本日のシンポジウムの出席者

大倉泰裕先生

学習指導要領・共通テスト
に深く関わっている先生

杉浦光紀先生

進学校での新テストを見
据えた授業改善の提案

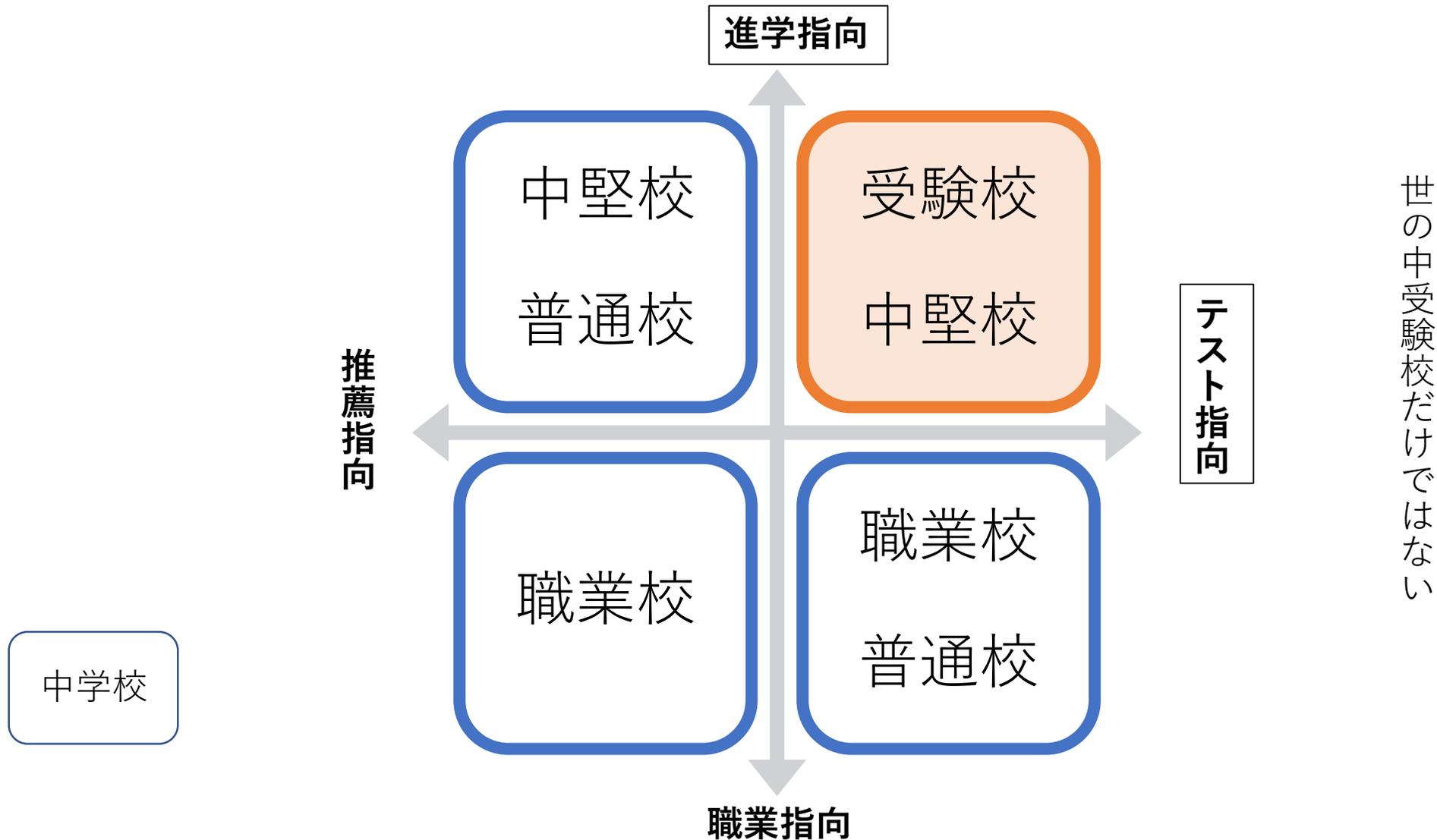
金子幹夫先生

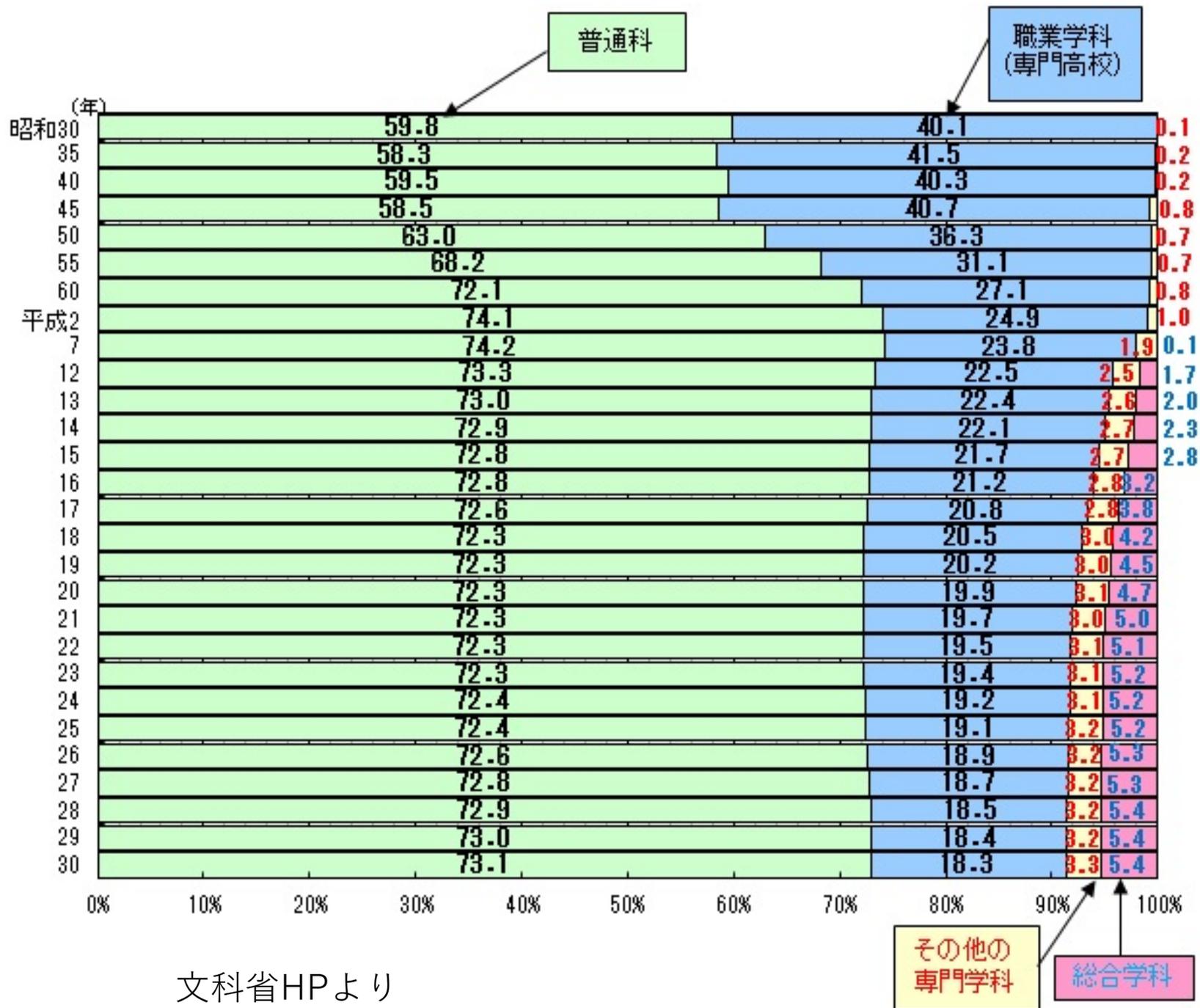
非進学校での新テスト
のねらいをいかした授
業改善の提案

李洪俊先生

高校入試の変貌から授
業改善を見据えた提案

* 学校種による区分 (高等学校の場合)





文科省HPより

- ・ 2018年5月全国高校生数
3,226,017人
- ・ 単純に割ると1学年約**100万人**
- ・ 2019年度センター試験受験者数

576,830人

- ・ 大学側でも、**推薦入試**で入学する学生の比率が高くなり、**早慶でも45%前後**に達する。
- ・ したがって、入試対策だけで授業改善をするというレベルの話ではない。

確認 共通テストと新学習指導要領

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度	2023年度	2024年度
小学校		全面実施				
中学校			全面実施			
高等学校				年次進行 で実施		全面実施
共通テスト	実施大綱の 作成公表	実施 2021年1月				新学習指 導要領に 対応

新学習指導要領と共通テストはリンクしている

参考：本日のシンポジウムのヒントに

なぜ共通テストが導入されたか

1 学教育の改革（今の大学ではダメ）

→ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーの導入

2 高校教育改革（だから高校教育も変わるべき）

→新学習指導要領の実施

知識・技能と思考力・判断力・表現力の区別、主体的で対話的な深い学び

3 高大接続改革（大学入試を変えないと高校教育は変わらない）

→大学共通テストの導入（記述・論述の導入、思考力をはかる問題）、英語試験の改革

準備の手がかり

- 2017年度 共通テスト試行 「現代社会」
- 2018年度 共通テスト試行 「現代社会」 「政治・経済」
- 試験時間60分 公民は全問マーク式
- いずれも大学入試センターのHPに、問題、正解、ねらい、正答率が掲載されている。
- <https://www.dnc.ac.jp/>

試行問題から読み取る傾向

- リード文の長大化→1万6000字、1分に400字を読むスピードが要求される
- 日常生活のなかからトピックを拾い上げたり、課題を発見する場面の設定→生徒同士の対話、授業レポートなど
- 学習過程を意識した場面設定→ツールミン図式、マトリックスがそのまま出たりする
- 複数の資料を読み取る、必要な情報を組み合わせて判断する問題が多い→思考力・判断力を重視

試行問題からみる学習スタイル

- 先生の講義から発展させるケース（17「現代社会」1）
- 生徒のレポートやノートから設問をつくる（17「現代社会」2など）
- 生徒のレポートを先生が添削する（17「現代社会」3）
- 生徒に試験問題を作らせる（17「現代社会」4）
- 大学のオープンキャンパスや大学のゼミでの対話（18「政治・経済」4、17「現代社会」5）
- 生徒同士の対話、親と生徒の対話、教師と生徒の対話（18「現代社会」5など）
- 高校新聞からの設問（18「現代社会」、17「国語」）
- 探究学習のスタイルから資料分析をさせる（18「現代社会」）

この傾向をどう活かすか

- リード文の長文化への対応→教科書を読むことになれる
- 課題発見的な場面への対応→授業のどこかで課題発見の似たような場面をつくる
- 学習過程の重視への対応→学習スタイルを真似する
- 複数資料の判断→複数資料をつねに念頭において提示



- 現在の改革を与件とするならば、これまでの授業スタイルの見直しが求められている

受験校以外での活用法

- 日常の授業の改善の手がかりに→教科書を「読ませる」指導を用語の噛み砕き、内容理解の徹底を通じた知識の定着（国語から社会科用語への転換と往復をこころがける）
- アクティブラーニング導入のヒントに→話し合い、対話、教えあいなどの場を設定する
- 資料分析の際の多様性の導入を→授業の際に複数資料をこころがける
- 日常生活のなかからの課題発見の提示例として活用する→リード文の設定を活用する（国語の問題とのリンク…生徒会規約の見直し、行政文書の読解など）

中学校への波及（高校入試が変わった）

- 新テストの試行問題の影響が見られる
- 資料問題の増加
- 記述問題の定着
- 時事的動向や近未来の課題に関する出題
- リード文の長文化
- 教科横断的な問題 など

- どこまで中学授業がそれに対応できるか、するか（本日の話題の一つ）

では、続きはシンポジウムで